

だいきく通信 第五十一号 「秋の号」

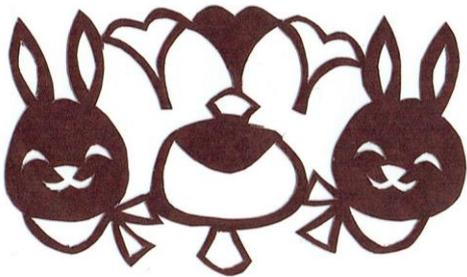
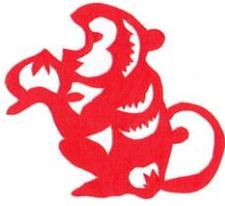
いあつて

今年の夏の暑さは、大変厳しいものでした。九月に入って気温が下がり、やっと息ができるように感じます。

新型コロナウイルスは一進一退という印象があります。涼しくなるのはありがたいのですが、ウイルスは温度や湿度が低いほうが動きが活発だとの話もあり、再び感染が広がるのではと心配です。こういうときこそ、気持ちを落ち着けて過ごしていきたいものです。

くれぐれもお身体に気を付けてお過ごしくださいませ。
社報「だいきく通信」第五十一号をお届けします。

今回の内容は、最近の当神社の話題、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。



大国神社の今

○玉垣の耐震性能について

防災対策の一環として、玉垣の耐震性能について、一部は新たに調査を行ない、確認しました。当神社境内の山手線側に設置されている玉垣について、平成二十三年までの境内整備を担当した建設会社に依頼して調査してもらいました（七月二十七日）。その結果、必要な個所に鉄筋が使用されており、十分な耐震性があることが確認されました。なお、本郷通り

側の玉垣は、境内整備時に新設したもので、内部の必要な個所に鉄筋を使用しており、こちらも十分な耐震性があることが確認されております。



○新年授与品のこと

少々気の早い話で恐縮ですが、神社ではすでに来年のお正月の準備が始まっています。来年の干支は「癸卯（みずのとう）」で、うさぎ年にあたります。うさぎは当神社の御祭神である大国主命ともゆかりの深い動物です。ということ、普段とは違う授与品を準備しております。また、新しい御守りも制作中です。どうぞお楽しみに。

お宮あれこれ〜秋の七草〜

「春の七草」は七草粥でよく知られていますが、「秋の七草」というものもあります。今回は季節にちなんで「秋の七草」についてお話ししましょう。

現在「秋の七草」とされているのは次の七種です。

萩（はぎ）、尾花（おばな）、葛（くず）、撫子（なでしこ）、女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）、桔梗（きぎょう）

「春の七草」は食用の草ですが、秋の七草はもっぱら鑑賞のための草花が選ばれており、『万葉集』の山上憶良（やまのうえのおくら）の歌に始まると言われています。

「萩の花 尾花 葛花 なでしこが花 をみなへし また藤袴 朝顔が花」

おもしろいのは、最後に「朝顔」を挙げていることです。ここでいう「朝顔」は木槿（むくげ）、旋花（ひるがお）、桔梗のことではないかと考えられています。実際、平安時代の『新撰字鏡』という辞書では「桔梗」を「阿佐加保（あさかほ）」と読ませているそうです。ちなみに、現代の朝顔は古くは「牽牛子（けにごし）」と呼ばれており、平安時代に入って輸入されたという説があるとのこと。

この「桔梗」ですが、『古今和歌集』の紀友則の歌では「物名（もものな）」あるいは「隠題（かくしだい）」という技法を使って読み込まれています。どこに「桔梗」が隠れているでしょうか。

秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

最初の部分「あきちかうのはなりにけり」に

「きちかうの花」という言葉が隠されています。

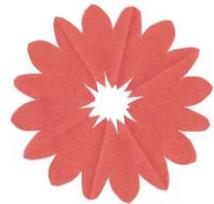
とところが、ここでは「桔梗」が「きちかう（きちこう）」と読まれています。なぜ「きちこう」「きぎょう」と二つの読み方があるのでしょうか。

「梗」という漢字は漢音ではキウなので「桔梗」は「キチコウ」となります。一方、呉音でキョウと読まれるので、「キチキョウ↓キツキョウ↓キキョウ」のように変化したのだろうと言われています。後者の読み方のほうが定着して現代まで伝わっています。

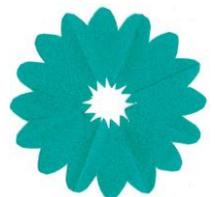
秋の七草には桔梗のほかにも、名前に特徴のあるものがあります。いくつか見てみましょう。

「尾花」はススキのことで、花穂が馬などの尾に似ているところからこの名前があります。「幽霊の正体見たり枯れ尾花」ということわざが有名です。ちなみにこのことわざは、もとは「化物の正体見たり枯れ尾花」（横井也有「俳家奇人伝」（一八一六））だったそうです。

「女郎花」の語源は不明だそうです。「女飯（おんなめし）」の意味だという説があります。たくさんの小さな花がつく様子を粟飯（あわめし）にたとえたと考えるものです。また、鎌倉時代の僧宗碩（そうてい）の『藻塩草（もしおぐさ）』には、次のような伝説が挙げられています。平城（へい



ぜい）天皇（在位八〇六〜八〇九）の時代、自分の愛した男が別の女と結婚すると聞いた女性が、世をはかなんで川に身を投げました。その際、女性が残っていた衣から、女郎花が咲き出したという話です。



大伴家持は「撫子」を詠んだ歌を多数残しています。次もその一つです。

わがやどに播きしなでしこいつしか
も花に咲きなむなそへつつ見む

(『万葉集』巻八・一四四八)

ここでは、撫子を種をまいて育てたこと

が詠まれており、日本で園芸植物を播種(はしゆ)して育てた最初の記録といわれています。「撫子」は古くは「常夏(とこなつ)」とも呼ばれていました。『源氏物語』は「常夏」を第二十六帖の題名としています。『源氏物語』には「常夏」「撫子」両方の言葉が登場しますが、「常夏」は妻や愛人、「撫子」は幼児の象徴として、使い分けているのだそうです。

「葛(くず)」という名前は、葛の名産地である奈良・吉野地方の「国栖(国櫨 くず)」という地名に由来するとされています。葛は葉の裏側が白みがかっているため、葉が風にひるがえると目立つところから「裏見」という言葉が生まれました。和歌などでは「恨み」にかけて用いることがよくあります。有名なものとして、歌舞伎「芦屋道満大内鑑(あしやどうまんおおうちかがみ)」に登場する次の歌があります。主人公・葛の葉が自分が狐であることを幼子(のちの安倍晴明)に打ち明けて、別れを告げる場面の歌です。

恋しくばたずねきてみよ はずみなる信田の森の うらみ

葛の葉

このように、秋の七草はそれぞれに興味深い歴史や物語をもっています。気候が穏やかになってくるこの時期、野の草花から想像力を広げてみてはいかがでしょうか。



参考文献 「以下ジャパンナレッジ利用」 『日本国語大辞典』(小学館)、『日本大百科全書』(小学館)、『世界大百科事典』(平凡社)、

祭礼・祈禱などの案内

○次回甲子祭

令和四年十一月七日(月) 午前五時～正午

○開運千人講祈禱祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈禱受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈禱を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは以下の電話番号もしくはメールにてお願いいたします。

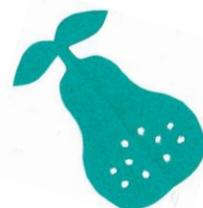
不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しく下さい。のちほどこちらからご連絡いたします。

〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話 ○三―三九一八―七九三〇

携帯 ○八〇―一九八七―八七二六

eメール daikokujinja@gmail.com



次号発行予定

「だいいこく通信第五十一号」、いかがでしたか。次号「冬の号」は、令和四年十一月七日甲子祭に発行予定です。

(連載まんが)

大吉うさぎ

～神社クイズ～

くまこまち 作



「だいいこく通信」第五十一号 令和四年九月八日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇〇〇〇〇三 東京都豊島区駒込三二二一十一

<http://www.daiokujinja.org>

